

武蔵野日曜聖書講筵 祈祷会

御霊の実証

――コリント前書2章――

1974年5月26日

小池辰雄

十字架・復活・聖霊は不可離 御霊の能力で証明 隠れた智慧 御国を待望する現実 霊に属する者 十字架が与えている無 本心にぶつつぶれてごらん 祈り

【コリント前2】

1 兄弟よ、われさきに汝らに到りしとき、神の証^{あかし}を伝うるに言と智慧との優れたるを用いざりき。2 イエス・キリストと及びその十字架に釘^つけられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。3 我なんじらと偕^{とも}に居りし時に弱く、かつ懼^{おそ}れ、いたく戦^{おの}けり。4 わが談話も、宣教も、智慧の美^{うらわ}しき言によらずして、御霊と能力^{ちから}との証明によりたり。5 これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力^{ちから}に頼^よらん為なり。

6 然れど我らは成人したる者の中にて智慧を語る。これ此の世の智慧にあらず、又この世の廃^{すた}らんとする司^{つかさ}たちの智慧にあらず、7 我らは奥義^{はじめ}を解きて神の智慧を語る、即ち隠れたる智慧にして神われらの光栄のために世の創^{はじめ}の先より預^{あらか}じめ定め給いしものなり。8 この世の司には之を知る者なかりき、もし知らば栄光の主を十字架に釘^つけざりしならん。9 録^{しる}して『神のおのれを愛する者のために』備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』とあるが如し。10 然れど我らには神これを御霊^{みたま}によりて顕^{あらわ}し給えり。御霊はすべての事を究^{きわ}め、神の深き所まで究むればなり。11 それ人のことは己が中にある霊のほかに誰か知る人あらん、かくのごとく神のことは神の御霊のほかに知る者なし。12 我らの受けし霊は世の霊にあらず、神より出づる霊なり、これわれらに神の賜いしものを知らんためなり。13 又われら之を語るに人の智慧の教うる言を用いず、御霊の教うる言を用う、即ち霊の事に霊の言を当つるなり。14 性^{うまれつき}来のままなる人は神の御霊のことを受けず、彼には愚かなる者と見ゆればなり。また之を悟ること能わず、御霊のことは霊によりて弁^{わきま}うべき者なるが故なり。15 されど霊に属する者は、すべての事をわきまう、而して己は人に弁えらるることなし。16 誰か主の心を知りて主を教うる者あらんや、然れど我らはキリストの心^{こころ}を有てり。



●十字架・復活・聖霊は不可離

「兄弟よ、われさきに汝らに到りしとき、神の証^{あかし}を伝うるに言と智慧との優れたるを用いざりき。」

「神の証^{あかし}」の、この場合の「証」というのはほとんど、

「神のことを証する」

というので、

「神の奥義」

というのと同じことです。ここのところには、「奥義」という言葉がかなり出てくるはずですが。「言と智慧との優れたるを用いざりき」と。それを伝えるのに、言葉や智慧の巧みさということは問題に نہなかつたと。

2 イエス・キリストと及びその十字架に釘^つけられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。

パウロは、ご承知のとおり、ユダヤ教的な律法の義に対して真つ向から自分で――それを非常に守っていただけ逆に――これと戦わざるをえなかつた。そこで、十字架の贖罪を、十字架につけられてしまっているところのキリスト――「釘^つけられ給いし」と、まあ大体この訳でいいんですが――

「十字架につけられつばなしであるところのキリストのほか」

ということは現在いつまでも十字架の贖罪を私たちに現実として迫ってくださっている、そういったキリストのほかは、

「汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり」

と。

「このキリストの十字架によってユダヤの律法も自分の罪も全部アウフヘーベンされてしまった。これを処分しかつまたそれを超えられてしまったということのほか何もうるまじ」

と。ということは、コリント教会には、いろいろな現象が起きているものですから、その中心点をしつかりさせるといふことの意味において第2節は非常に力強く言ったわけですから、そうかといって、パウロはなにも御霊のことをいい加減にしているのではないことは、もうすぐこれを読んでいられるうちに分かりますけれども。徹底的に御霊を言い、徹底的に十字架を言い、徹底的に復活を言う、ということが決して一面的でない。必ずその背景に、十字架を言えば復活と聖霊がある。復活を言えば十字架と聖霊がある。聖霊を言えば十字架と復活がある。どれをもただ相対的な価値ではなくて、どれをも絶対的な価値として、はっきりと言う。それを抜いてしまったらば、他の二つはダメになってしまう。この三つはそれぞれ絶対性をもちながら、どうしても不可離の関係にある。相対的な価値において不可離の関係にあるというのだったら、これは常識的なことになってしまう。ところが、絶対



的な価値において不可離の関係にある。これが私はこの福音の大事な性格だと思う。だから、「何をも知るまじと心を定めた」という。

「徹底的に十字架されれば、どうしても御霊は来ざるを得ない。本当に御霊を受けるという事態においては、十字架が土台とならざるを得ない」と。そういう意味です。

●御霊の能力で証明

³我なんじらと偕に居りし時に弱く、かつ懼れ、いたく戦けり。

これはまたローマ書でも同じようなことを言ってますけれども、「御霊と能力との証明によった」と。

「我なんじらと偕に居りし時に弱く、かつ懼れ、いたく戦けり」

と、ちよつとおもしろい言い方をしますが。人間の弱さ、これはキリストも人間の弱さを持っていた。それから、ゲッセマネにおいても彼はいたくおののいた。これが非常に、むずかしい――「むずかしい」というのは――躓きやすいんですけれども。パウロは、大いに自信があつたかと思つたら、「偕に居りし時に弱く、かつ懼れ、いたく戦けり」という。人間の弱さをそのまま自ら認める人は、

「我弱きときに強し」

とパウロが言つたように、本当の強さ、本当の平安というものが逆にくるということです。

⁴わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。

これはもうはつきりここでパウロは、キリストの御霊の力をもつて証明することができた。

これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん為なり。

人間の側の強い弱いは問題ではない。「御霊と能力との証明によった」と。これは本当にパウロはキリストの御霊を身につけていましたから、はつきり言えるわけです。こういう、

「御霊と能力との証明によりたり」

というようなことは、今の普通の伝道者がはつきりと言えないんです。

汝らの信仰の、人の智慧によらず、

また、自分の確信によらず、

神の能力に頼らん為なり。

と。自分の確信でもない。こういうところがもう非常にはつきりしてますから。

「千万人といえども我ゆかん」

と孔子が言つたけれども、それは本当に私たちはこの「御霊と能力との証明」によれば、それができるわけです。



●隠れた智慧

6 然れど我らは成人したる者の中にて智慧を語る。これ此の世の智慧にあらず、又この世の廃^{すた}らんとする司^{つかさ}たちの智慧にあらず、⁷我らは奥義を解きて神の智慧を語る、

「奥義」は「ミステリオン」という言葉です。これは非常にパウロが神学的に深く言ったわけですが。

即ち隠れたる智慧にして神われらの光栄のために世の創^{はじめ}の先より預^{あらか}じめ定め給いしものなり

という言い方です。神の奥義の世界に入ると、相対的な時間を超越する。そうすると、「世の創の先」というような気持ちが出てくる。

8 この世の司には之を知る者なかりき、もし知らば栄光の主を十字架に釘^つけざりしならん。⁹ 録^{しる}して『神のおれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』とあるが如し。

これはイザヤ書の言葉です。即ち我々の目がまだ見たことがない、耳で聞いたことがない未聞の世界、人の心がいまだ思ったことのないものである。これは本当にそうです。聖霊の体験をすると、全く今までの肉眼で見ていたところ、肉の耳で聞いていたところ、また肉の心で思っていたところをもうひとつ超えますから。心眼で見、心耳で聞き、また霊的な心で思うことになり、まさに次元的にちがったものですから、このことがはつきり言える。

10 然れど我らには神これを御^{みたま}霊によりて顕^{あらわ}し給えり。

御霊の世界に入ると、このことが分かつてくる。キリストが弟子たちに――あんな素晴らしいキリストに直接、その言葉を聞き、キリストを直接に見て、心も通っていると思っていたかもしれないけれども、ダメだと――

「今に私の言ったりしたりしたことが分かるぞ」

というのは、

「正に御霊が来なければダメなんだ」

ということですが。

「見れども見えず、聞けども聞こえず、思えども本当にとどかない」

というのが、弟子たちがキリストと一緒にいたときの現実であった。それがベールがとれてしまったわけですね、この御霊が来てからは。これははつきりそうです。

御霊はすべての事を究^{きわ}め、神の深き所まで究^{きわ}むればなり。

だから、私たちは御霊の光でものを見だすというと、本当に何か不思議でしようがない。自然現象を見ても、あるいは本を読んでも、何をして、何か今までと違ったところが見えてくる。行き詰まりをしない。ゲートであろうと何であろうと、ひとつもそのために、



こつちが

「とてもこれは及ばない」

なんていう気持ちにならない。これは本当に不思議ですね。

●御国を待望する現実

「それ人のことは己が中にある霊のほかに誰か知る人あらん、かくのごとく

神のことは神の御霊のほかに知る者なし。

普通、御霊の経験のない人が、

「そんなことを言ったって、それは何か主観的なものではないか」

というようにことをすぐ言うけれども、絶対に主観ではない。もし主観だったら、こんな確信ならざる確信はこない。何か不安になってしまう。その不安がとれてしまうわけです。それは人間だから、人間的な意味における不安は、雲はかかるかもしれない。けれども、もう根底的に不安というものはなくなってしまう。

「どうにでもなりやがれ」

というところがちゃんとある。それは捨て鉢でも何でもなし。それは何かしらんけれども、

「神さまと一緒に、キリストと一緒にこの歴史の一環を担いながら終末の世界に向

かって進んでいる」

という大きな歴史的な自覚がでてくるわけです。神の国をやがてきたらせるという、

「御国をきたらせたまえ」

と、それを待望する今の現実です。そういった意味にける歴史的な自覚といえますか、これは本当にありがたいですね。もし、それでなかったら、人生の意味はなくなってしまう。どんなに地上で事業が失敗しようが、やりたいことができなろうが、質的には、ちょうどブラウニングが言ったとおり、

「百万を望んで一つも得なくても、その人は本当の人間だ」

と。そういった大きな、終末の世界を既に先取りしてしまっているんだよな。そして、それに向かつて進んでいるわけです。どこで倒れても必ず到達するんです。終末の世界に対するもの凄い希望をもたない人は、それこそ迷ってしまう。そういう未来というものと現実というものが単なる緊張関係ではなくて――よく「緊張」というようなことを言うけれども、それも分らないこともないけれども、緊張だけではダメなんです――その未来が現在の中に溶け込んでいなくては。

「神の国は汝らのうちにあり」

ということと終末の世界を望むということが溶け込んでいるところの、ピタリ一つということ。それには緊張関係という面もありますよ。ありますけれども、単に緊張関係ということだけではダメなんです。よく私はあの「緊張関係」という言葉を聞くけれども、そん



な緊張ばかりしてたら、くたびれてしまうよ。緊張ということの意味もわかるけれども、溶けていなければ。真理というものはおもしろいもので、緊張もありましょう、しかしながら、本当に既に溶けているところももうひとつ奥にありますよということ。そうすると、その緊張が決して——何と言いますかね、力ある張りであって——何かくたびれるような張りではなくなるんです。

●霊に属する者

そういうようなわけで、御霊がくると、ヨハネ書簡の中にも、

「御霊がくれば、もう他の人が教える必要がない」

というようにことが書いてある。それはもう神のことはみんな自分でもって悟らしめられてくる。といって、

「それでは、私は何も教わらない」

というのではありませんけれども。そういうようにキリストの、聖書の、あるいはパウロでもヨハネでも預言者でも、言っていることがみんなつかめてくるでしょ。あるいはその奥が読めてくるでしょ。これが御霊です。

御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。

というのがこのことです。パウロはこういうことをもう大胆に率直に書いているわけです。

¹² 我らの受けし霊は世の霊にあらず、神より出づる霊なり、これわれらに神の賜いしものを知らんためなり。¹³ 又われら之を語るに人の智慧の教うる言を用いず、御霊の教うる言を用う、即ち霊の事に霊の言を当つるなり。¹⁴ 性来

のままなる人は神の御霊のことを受けず、彼には愚かなる者と見ゆればなり。

これは愚かなる者と見える。躓きです。

また之を悟ること能わず、御霊のことは霊によりて弁^{わきま}すべき者なるが故なり。

¹⁵ されど霊に属する者は、すべての事をわきまう、而して己は人に弁えらるることなし。

正にそのとおり。分からないんです、次元がちがうから。

¹⁶ 誰か主の心を知りて主を教うる者あらんや、然れど我らはキリストの心をも有てり。

と。スラスラとパウロは書いているこのことが、普通の注解書や何かでは結局、言葉づらをただ説明はするかもしれないけれども、決して本当につかんでいない。これはどう考えても、自分が破れて御霊を本当にいただいた、その御霊の体験をしないかぎり、パウロが何を言っているかは読めないんです。我々がこの集会をして、いつも大事なことは、その世界に一回毎に深く入っていくことです。質的に。「これでいい」という世界はないですよ。これでいいという世界はないけれども、



「確かに来ています」

ということが言えなくてはいかん。何かしらんけれども、自分の中から

「主さまー」

と呼ぶ。自分の何か苦しまぎれに、ただ「主さま！」なんて言っただけで、これはくたびれてしまう。何かしらんけれども、内側から押し出してそういうことになるというのがこの御霊の世界です。

●十字架が与えている無

瞑想してその中に入る。これは何か精神状態を整えるというようなことではない。私はその点で少し手島さんたちのグループは——彼らはまちがっているとは決して言わないけれども——みそぎをやったり、水を浴びたり、火渡りしたり、そういうようなこちら側を何か妙に鍛えて精神統一をして、その中に入っただけで済ませようとする。悪いとは言わないけれども、私のはもつと、信仰のたちからいうと、やはり法然・親鸞の方です。手島さんのは禅宗的な面が多い。親鸞をあまり引用しないところをみてわかる。禅宗的なもの、^{へきがんろく}『碧眼録』とかああいう方面のものが多くいます。

ところが今度は、私の方でいわせると——なにも今、対立してものを言っているのではないけれども——私はしょっちゅう「無」と言うでしょ。これも悟りの無ではない。これは十字架なんです。十字架が、あるがままの私の中にはっきりと、あるがままでありながら（自我が）すっ飛んでいる現実を与えている。十字架があるがままに。だから、こちらの実存がどうだ、今の信仰状態がどうだなんていうことは問題でない。あるがままでありながら、キリストの十字架という事実はもの凄い力をもっています。もの凄い現実をもつて私に迫ってくるから、もうこっち側の状態なんていうものを、およそ見るとまも気分もなくなってしまうわけです。圧倒されてしまう。圧倒されるから、そうすると（自我が）すっ飛んでいるでしょ。そうしたら、聖霊は来ますよ。そこを祈りの世界でいつも自分でもつてつかまえてください。電車の中であろうとどこであろうと、瞬間的にバツと来てしまうから。もう秘訣はこれなんです。そうするともう、バツともの凄い光がくる。だから、

「神の奥義を究めるなり」

と。こちらがぬければ、これはもう、いわゆる私のない世界ですから、もの凄いものが出て来るわけです。

「これ能力と奥義の実力による」

とパウロが言う。

「言葉だの何とかのと詮索なんかしているひまはありません」

と、パウロは言っているわけですね。パウロさんというのは実に言葉も素晴らしい人だけ



れども、そんなものを問題にしていない。まあ、パウロというひとは——こないだ私は宗教の時間にパウロの話をしたけれども——大変な人です。キリストをおいてほかにパウロの右に出る者はない。ということは、彼が人間として何かではなくて、本当にぶつつぶされたから。もう自在に彼は使われた。

だから、あなた方もこの中に入って、グングンとキリストの中に入ったらもう——その点では決して従来の自分なんていうことをひとつも考えることはない——どしどし進んでください。そうしたら、自分でも不思議なことが起きてくる。そして、そこでもってグングン、何か仕事でも何でもぶつかっていけば、新しい新創造をなすことができる。

「人新たに生まれずば」

というのが本当にそこに成っていく。

● 本当にぶつつぶれてごらん

キルケゴールやルターはずいぶん悪口を言うけれども、私の悪口なんかまだいい方です。キリストだって、

「あの狐に言え」

なんて言った。真理の世界では、戦うところははつきり戦わなくてはダメです。もうちつともこわいものはない。そのかわり、聖霊のこと、この御霊の福音のことになったら、一歩も退かない。それだけの確信ならざる確信を私はいただいていますから。皆さんも、一人びとりは絶対に使命があるんです。あなた方は、二十歳台でこの世界に入ったら、もの凄くもうけものだからね。百万円や二百万円のさわざではない。一億円、二億円。会費一億円を払ってもらおうかな(笑)。冗談だよ。これは金で払えないんです。無限無量ですから。それはどんなことが起きてても、必ず勝ちます。ですから、

「この私がわからんか」

と皆さんは言ってくださいよね。

「私を何とと思っているか。私と結婚しないやつはバカだ」

と(笑)、それくらいの自信を持ってください、男でも女でも。そうですよ、本当に。本当にもったいない話だよな。それくらいの自信をもってください。それはペテロが、

「我を見よ」

と言った。本当にぶつつぶれている人は本当の権威を持っている。これは絶対に真理です。から。ぶつつぶれていない、「俺は何ものか」なんて思っているやつはダメです。本当にぶつつぶれてごらん。そうしたら本当の権威が出てくるから。これはパウロが御霊の力によつて、

「神の福音は言葉ではない。力だ」

と言うのは、正にこのことです。だから、歴史を通し地のはてまでも、このパウロの新約



聖書と書簡は進んでいく。

最後にナポレオンはあの告白をした。さすがにナポレオンだと私は思う。その一言のゆえに、私はナポレオンは好きになったね。その他のことはもちろん嫌いだよ。だけれども、あれはいい。ヒットラーのやつも最後に悔改めればよかったんだけれども。

「俺は悪かった。俺は地獄のどん底に入る」

くらいのことを言えばよかったけれども。終わります。

● 祈り

さあ、祈ります。力強く、ただし小さな声で。祈りは小さな声でも力が入るんです。

主さま、日曜は楽しくて仕方がありません。日曜は本当に砂漠のオアシスに来て、

「この水を飲めば渴かない」

とあなたが仰ったように、そういう水を、あなたの御霊の源泉を飲み、また、御言の葉っぱをくぐらしまして、こんなにうれしいことはありません。

今日の午前のエレミヤ記第8章におけるこの真理も、また今、コリント前書第2章の、十字架を徹底的に言ったかと思えば、パウロは御霊の奥義を語っていました。本当にこれが、言わず語らずのうちに、十字架と御霊が一つであることを彼はもう既に実証しております。

主さま、私たちはこの福音を本当にいよいよ身につけて、驚くべき原始力の結晶体となつて、私たちは進んでまいります。どうぞ、ここにある兄弟姉妹たちをそのような驚くべき原始力的な人間として鍛え上げてくださらんことを切に願ひ奉ります。

時あれば、「我を見よ」と言つて、相手がぶつ倒れるくらいの力をあなたは与え、敵をも担い上げるところの、救い上げるところの驚くべき力が私たちを通してお現れくださらんことを切に願ひ奉ります。一人びとりの人生にはいろいろなことが起きるかもしれませんが、しかし、いいです。一切をとおして、あなたのこの御霊の実証ができ、また御名の栄光があがるのが、私たちの最大の喜びであり、人生の目的でありますがゆえに感謝いたします。相対的な運命環境なんかどうでもいいです。どうぞ、天国人としての大勝利をもつて進んでいくことができますように。力より力へ、光より光へ、いよいよ歓喜より歓喜へと進んでまいります。心から本当に感謝いたします。

また今日は、どういうことか、Hさんがまだ来てませんが、どうぞ、彼女がもし何か雲に被われていましたならば、あなたが御霊の光をもつてこれを貫き、喜びの世界に彼女の魂を上げてやってくださるよう切に願ひ奉ります。また、その他、諸所方々に一人びとり祈るべき対象がありますが、どうぞ、その対象がこの兄弟姉妹たちの祈りをおして救われていくことができますように、切に願ひ奉ります。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれ共に御名により捧げ奉る。アーメン！

